

## ルカ1章26-38節 「恵みに恵まれた人」

### 1A 希望を与える奇跡

1B 神の受肉

2B 数々の奇跡

3B 死者からの甦り

4B 神の預言の約束

### 2A 信じ、受け入れる聖徒たち

1B 恵みを受ける人々

2B 女の子孫

3B マリア

1C *ダビデ家の処女 26-27*

2C *ひどい恐れ 28-29*

3C *神の子キリスト 30-33*

4C *聖霊による身ごもり 34-37*

5C *御言葉を受け入れる、はしため 38*

4B ヨセフ *マタイ1:18-25*

1C *マリアへの愛 18-23*

2C *主の言葉への献身 24-25*

## 本文

私たちが今、交読した聖書の箇所は、マリアが天使ガブリエルから、イエスを身ごもることを伝え聞いたところです。これをしばしば、「受胎告知」と呼びます。マリアが非常に恐れて、ひどく戸惑っていますが、けれども、それでも、あなたのおことばどおりになりますように、と最後は答えています。マリアの言葉、また後でヨセフと天使とのやりとりも読みたいと思いますが、そこから、私たちにも与えられている神の恵みを探っていきたいと思います。

### 1A 希望を与える奇跡

クリスマスの時期に入ってきていますが、日本ではそれが過ぎれば年末、大晦日。それから年が明けて元旦のお祝いをして新年に入ります。いつもと変りなく、その時期を過ごし、その行事をこなすという感じでしょうか？いつものことが、あまり何も変わらずに過ぎて行く…。ある漫画で、こんな一コマがありました。「空気読んで 空気読んで 空気読んで生きてたら… 空気みたいになっちゃった…」<sup>1</sup>全体の何となくの雰囲気の中で生活していたら、自分自身が何となくの人間になってしまって、命がなくなってしまうということです。

<sup>1</sup> <https://twitter.com/Jios100/status/1073829795035672576>

人には、非日常性が必要です。いつもの生活ではなく、これは見たことがない、聞いたことがないという意外性、あるいは奇跡と言ってよいでしょう。いつも自分のできること、していること中で生きているならば、虚しさが残り、死に至ります。しかし、これまで経験しなかったこと、知り得ないことを知れば、そこに命があり、希望を見出せます。この生活以上に期待できるものがあると信じていることができるからです。ですから、そういった奇跡的な話には人々は耳を傾けます。テレビ番組で「アンビリバボー」という名前のものまでありますね。「信じられない」という意味ですが、奇跡の実話を紹介しています。そこに希望が見出せるからですね。

聖書を読むとその話が奇想天外なことばかりです。その意外性に驚き、なんでこんなことを記録しているのかと戸惑いながらも読み進めると、いつの間にか自分自身がそこに希望を見いだしていくようになります。そこには、奇跡があるからです。奇跡によって、世界は人間だけの世界ではなく、人間を造られた神が介入しておられることが分かるのです。

### 1B 神の受肉

キリスト者が信じていることとすれば、本当に理解しがたいことばかりです。けれども、それは一つ一つ人々に希望を与える奇跡になっています。一つは、まさに私たちが先ほど読んだ、イエスの誕生です。処女から生まれました。神の霊、聖霊によってマリアが妊娠したということです。ヨハネによる福音書によれば、「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(1:14)」とあり、天地を造られた神が肉体を取られて、生まれたということです。私たちが信じている、イエスが、天地を造られた神なのに、人として生まれたということです。

### 2B 数々の奇跡

イエス様は、人として育ち、30歳ぐらいになってから公の活動を始めましたが、病人を直し、悪霊を追い出し、また、死人をもよみがえらせました。人ができるようなことでないことを、イエス様が行われました。これらのことを行われたことも、キリストを信じる者たちはみな信じています。

### 3B 死者からの甦り

そして、最も大きな奇跡は、ご自身の死者からの甦りです。十字架によって死んだのに、三日目に墓の中から出てきました。そのことを宣べ伝え始めたのが弟子たちであり、復活のキリストを信じ生きているのが、キリスト者と呼ばれます。なぜ、十字架という死刑台で死なれる必要があったのか？それは、人間が神に背いて生きてきた、その罪を身代わりに受けて死んでくださったのです。このように、奇跡から奇跡で、死者からの甦りをも信じています。

### 4B 神の預言の約束

そしてもう一つ、これらのことは全て聖書に書かれていることで、なぜこれを信用できるのか？ということがあります。その最も大きな理由は、前もって語られていたから、ということです。神から預

かった言葉ということで、預言がその通りになっています。キリスト者の生活というのは、このように、ひたすらに神の言葉をその通りあると信じて、受け入れ、それで希望を持ち、生きて行くということです。なぜなら、語られたことは確かに一つももらさず、これまで実現してきたからです。ですから、これからのことも神の語られたとおりになると信じています。

事実、その信じたことが自分たちの生活にも具体的に現れるところにも、神が生きていることを実感していきます。奇跡があることを信じるだけでなく、奇跡が自分の身にも起こるといふ、その大いなる恵みを得る機会が、人間には与えられています。その一つの手本となるのが、イエスの母マリアであり、また父のヨセフです。

## 2A 信じ、受け入れる聖徒たち

### 1B 恵みを受ける人々

ここで御使いガブリエルがマリアに強調しているのは、「1:30 あなたは神から恵みを受けたのです。」ということです。神の恵みに見出されたということです。聖書には、このように暗き世において、神の恵みに見出された人々がいました。世界中に洪水が起こる前に、箱舟を造りなさいと命じられたノアがいますが、ノアは、「主の目に恵みを見出した(創世 6:8 直訳)」とあります。それで、ノアとその家族は、神からの水の裁きから箱舟によって救われました。そして、モーセは主に対して、「私とあなたの民が主の目に恵みを見出していることは、いったい何によって知られるでしょうか。(出エ 33:16 直訳)」と言っています。イスラエルの民は、エジプトから救い出されていますが、それは神の恵みに見出されたからです。

何をもって、恵みを神からそのように受けられているのでしょうか？それは、何か良いことをしているから、ということではありません。その反対です。恵みというのは、「自分の功德によらずに、得られている恩恵」であります。神から一方的に好意をもたられて、良くしていただくことです。ノアにしても、モーセにしても、自分も含めて、本来、裁かれなければいけない存在であることを知っていました。神の基準からして世が不正を行っており、自分は神の憐れみを受けなければいけない存在であることを知っていました。神の憐れみと恵みなしには生きられないということを認めなければ、恵みを恵みとして知ることはできません。また、神を信じていることです。神がおられて、すべてのことは神によって成り立っており、神が支配しているということを信じているかどうかであります。神の恵みは、全ての人に与えられていますが、それを自分のものとするのは、贈り物を自分のものとするように、相手を信頼して受け入れることであります。

### 2B 女の子孫

聖書には、神が救うという約束の言葉があります。初めの人アダムが罪を犯して、それから世界に罪が入りました。そして罪によって人は死に、死んだ後に神の裁きを受けなければいけません。けれども、神は「女の子孫」によって人を救うことを約束されました(創 3:15)。女から生まれる男の

子によって、人々が神から救われることを教えられました。ですから、多くの女性が、男の子が生まれることに救い主、キリストの期待をかけていったのです。エバがカインを生んだ時からそうでした。サラが不妊であったけれども、奇跡的に 90 歳の時にイサクを生みました。自分の生まれて来る子が、本人が、あるいはその子孫から救いが来るのだと信じたのです。

神がすばらしいのは、女から生まれる人の子によって救いを与えられたことです。もし、天にある星か何かに救いがあるのであれば、私たちにはあまりにも遠い存在であり、望遠鏡で眺めなければいけないのでしょうか。けれども、女が子を産む時に、これほど人間の弱さを表しているものはないでしょう。産みの痛みから始まり、多くの血を流して赤ん坊を出産します。そして、生まれてきた子は優しく抱き、お乳をあげて、それで何とか生きることができます。その子を通して救いが来るように神はしておられるのです。

ですから、福音はすばらしいのです。私たちの救いは、どこか遠くのことではなく、すぐそばに、実に赤ん坊として生まれたイエスに見出されるのですから。女から出た子として生まれてきたのであれば、生身のある人間であり、私たちがつながることができます。いつも小さな子を連れているお母さんを見ると、とても尊敬の思いが出てきます。頼もしいです。そこには、日常生活にしっかりと密着している姿が出てきます。その密着しているところに、世界を動かす神の奇跡をもたらす、神があなたと共におられることを教えてくれるというのです。その方がイエスであり、そしてクリスマスはそのことを思い起こすためにあります。

### 3B マリア

それで、その救いが自分の身ごもる子から出て来ることを告げられたマリアの話を、もう一度、観てみましょう。

#### 1C ダビデ家の処女 26-27

26 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアと叫んだ。

御使いが、ガブリエルという名前まで持っていて、マリアに近づいています。唐突に聞こえるかもしれませんが、これは、話の途中から聞いているようなものだからです。その時から約 530 年前、ダニエルという預言者に、ガブリエルが現れるのです。そして、油注がれた者、キリストが来られて断たれるという預言をしているのです。それが、紀元前 445 年から数えて 483 年後です。けれども、バビロンの暦と今の西暦とは数え方が違うのですが、例えば 365 日ではなく 360 日でした。そういったことも計算すると、紀元後 30 年辺りのことです。イエスが 33 歳か 34 歳とかでちょうど、十字架に付けられて命が絶たれました。ですから、マリアがいた時はちょうど 30 数年前のこと。そ

の時が満ちた頃でした。時空間を超えて動くことのできる天使は、マリアのところにも来て、それでキリストを身ごもることを告げに来たのです。

そこは、あまりにも名の知られていないナザレという、ガリラヤ地方にあった村でした。当時の文献にもほとんど出てこないという、本当に知られていない村でした。しかし、そこに「**ダビデの家系のヨセフ**」という人がいたのです。ダビデの家系だということが、ここで味噌です。預言者イザヤがその時から約 700 年前に預言していたのです。「9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」ダビデの家系から、キリストが現れることを話していました。

そして最も強調されているのが、「**処女**」だということです。許嫁になっているだけで、まだ婚姻の関係を結んでいません。ですから、当然、男に近づいていません。ここで、同じ預言者イザヤが語ったことが、大きく関わってくるのです。「7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」女から生まれて来る男の子が、神の子となり、その子は処女から生まれて来るという預言だったのです。ですから、ここでマリアはまだ処女だったのだということが強調されています。

### 2C ひどい恐れ 28-29

28 御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

先に説明したように、マリアは、とてつもないすばらしい恵みに見出されています。恵まれていて、主が共におられるとガブリエルが宣言しています。けれども、マリアの初めの反応は、「**ひどく戸惑って**」います。これは、恐れているということよりも、もっと強い言葉が使われていて、ひどく戸惑っているとなっています。ガブリエルが光輝く天使ということもあるし、また彼は男性の格好をしていたのかもしれませんが、当時は、許嫁の女に近づくことすらしてはいけないことでした。しかし、マリアの優れているのは次です。「**考え込んだ**」とあります。これは、「心に留めておく」とも訳せる言葉であり、とんでもないことが自分に語りかけられていても、全く何のことがさっぱり分からなくとも、それでも感情に任せて結論を出すことなく、冷静になり、思慮深く、語られたことを思い巡らしてみ、ということなのです。

逡巡するということ、これは面倒で辛いプロセスですが、しかししなければいけないことです。私

たちの世界では、あまりにも理不尽なことが起こります。理解をはるかに超えることが、続けざまに起こっています。自分の身にも起こり得るでしょう。そうした中であって、それでも、もしすべてに主権を持っている神がおられることを知るならば、そこでマリアのように思慮深く考えて、神が何かをしておられると、その状況を受けとめることができます。マリアから生まれたイエスこそが、その理不尽の極致に置かれた方でした。罪がないのに、極刑である十字架に付けられるのですから、しかし、「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」と祈られました。自分の願うことよりも、神の意志が大事とされたのです。

### 3C 神の子キリスト 30-33

30 すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

先に引用した、イザヤの預言の通りのことが、あなたの身に起こりますということを告げています。ひとりの男の子が生まれるが、それは神の子であり、神ご自身と等しい。そして彼はダビデの王座に着き、永遠の神の国を治めることです。ここで、強調されているのは人として生まれるだけでなく、神として来られるということです。

### 4C 聖霊による身ごもり 34-37

34 マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

マリアは、男の人を知らないのに、処女なのにどのようにしてそのようなことが起こるのかを尋ねています。それで御使いは、はっきりと答えます。聖霊が臨むのだということです。神の御霊が臨み、それであなたは身ごもると告げられます。ここで、「いと高き方の力があなたをおおいます」とあります。これは、神の幕屋に栄光の雲が満ちる時に使われている言葉と同じです。つまり、聖霊が臨まれると、マリアの体そのものが、神がおられる住まいのようになるということです。イエスご自身が神の栄光の現れであり、それで神の栄光がそこから現れるということです。イエスがおられるということは、そこに神が住んでおられる、神の恵みとまことの栄光が輝いているということです。

36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。37 神にとって不可能なことは何ともありません。」

エリサベツには、高齢なのにバプテスマのヨハネを身ごもっていました。しかも、若い時から不妊の女と言われていました。そういった神の恵みの介入が始まっているのですから、あなたにも、人間には不可能と思われることが、可能になるのですということです。かつての不妊の女サラにも、同じように主には不可能なことはないと御使いは宣言していました。

#### 5C 御言葉を受け入れる、はしため 38

そしてすごいのが次です。38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

マリアは、自分を主のはしためと言っています。これは女奴隷のことです。自分の身に何が起ころうとも、主が語られることであれば、それを受け入れますということです。その言葉通りに、自分の身になりますようにという信仰を持っています。かつて、悪魔に惑わされたエバの事を思い出してみよう、主のことばに反対する蛇の言葉を、そのまま受け入れました。その反対のことを、今、マリアはしているのです。

これはとても難しいことです。私たちは、自分のために神のことばを受け入れようとして、自己実現のために、自分のためになるならば、受け入れるかもしれません。けれども、その反対に、自分の身に何が起るか分からないことであっても、それを受け入れるのは、ほんとうに、はしための立場にならなければいけません。それは信仰によって、これが確かに神の恵みであることを知って、心から受け入れることです。

#### 4B ヨセフ マタイ1:18-25

このようにして、主が御使いを通して語られましたが、次に、このような恵みに恵まれたマリアのことを聞いたヨセフ側の話が、マタイによる福音書のほうに書かれているので、ざっと見てみましょう。

#### 1C マリアへの愛 18-23

18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。19 夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った。20 彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。21 マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」22 このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。23 「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。

いかがでしょうか、ヨセフはマリアが聖霊によって身ごもったなどということは、初めは知る由もありません。許嫁の者が他の男と通じたとなったら、その時は既に結婚したのと同じぐらいのものであったので、姦淫の罪に問われます。ですから、石打ちの刑に処せられます。けれども、その前にヨセフはマリアのことをかばうために、内密に離縁しようとしたのです。そこまでの思い巡らし、逡巡をしたのです。ここでも、マリアと同じ、思い巡らしをして、一体何のことかと考えたのです。そのように、自分の思いにとらわれずに、主の御心を求めている人には、主は御心を知らせてくださいます。その胎の子が聖霊によるものであり、あなたはダビデの子なのだから、あなたから、救い主が現れるのだと教えておられます。マリアにもそうでしたが、イエスと名づけなさいと命じています。イエスは「ヤハウエは救い」という意味です。主が救ってくださるということです。

### 2C 主の言葉への献身 24-25

24 ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、25 子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた。

これも、すごいことです。ヨセフは、主の言葉をそのまま受け入れ、なんと妻を迎え入れても、夫婦の関係をイエス様が生まれるまで持たなかったのです。そのようにして、マリアから出て来る子が、確かに聖霊によることを彼も証したのです。そして、名前をイエスと名づけました。マリアとヨセフでは、ヨセフが男で彼が頭ですから、マリア以上に責任があります。彼が主の命令に従って、その通り行ないました。

いかがでしょうか、イエスをこの世に赤ん坊としてもたらすのに用いられたマリアとヨセフという器です。彼らのように、神の恵みに見いだされることを、神は一人一人にも望んでおられます。そこで必要なのは、神の救いです。イエスという名にあるように、主こそが救ってくださる方なのだ。この方が、私たちが暗き世から救い出し、また自分の罪から救ってくださる方なのだ知っていることです。自分に救いが必要であることを認めるでしょうか？神が救いをもたらしたことを、信じ、受け入れることができるでしょうか？そうすれば、赤ん坊に救いがあるように、自分の日常のど真ん中に救いがあることを知るようになるでしょう。